

2019.8.30

無助詞について

東京女子大学日本文学専攻
丸山直子

1

1. 無助詞とは
2. 先行研究における扱い
3. コーパスにみる無助詞
4. 今後の課題

2

1. 無助詞とは

- (1) ハサミある？
- (2) 新聞読む？
- (3) 函館で「いかソーメン」食べるの忘れたでしょ。
- (4) その時計、止まっているね。
- (5) 私、ウナギ食べたい。

3

1. 無助詞とは

- (1) ハサミ ϕ ある？
- (2) 新聞 ϕ 読む？
- (3) 函館で「いかソーメン」 ϕ 食べるの ϕ 忘れた
でしょ。
- (4) その時計 ϕ 止まっているね。
- (5) 私 ϕ ウナギ ϕ 食べたい。

4

2. 先行研究における扱い

松下大三郎(1928)

「単説題目態」

三上章(1960)

「はだしの名詞」

尾上圭介(1987)

「主語に「は」も「が」も使えない文」

丹羽哲也(1989)、筒井通雄(1984)、
甲斐ますみ(1991)、長谷川ユリ(1993)など

5

丸山直子(1995)より

小さく係るものと大きく係るものの2種がある。

小さく係るもの(直後の述語に係る、埋め込み句の内部の述語に係るなど)は単なる省略と意識され、大きく係るもの(離れた述語に係る、文頭に位置するなど)は主題性が高いと意識される。

「雨降ったときに」「外歩いている人が」
「この手袋、誰が買ってくれたの？」
「東京、行ったことないんで、ちょっとわからないんですけど。」

6

丸山直子(1995)より

書き起こしの対話データを用いて調査

使用したデータは、財団法人機械システム振興協会(1992)記載のデータベース(対話数:86、総文数:約8,000)

格の無形表示(無助詞のもののみ)は全部で735存在した。

そのうち動詞に係るものについて、IPAL動詞辞書(情報処理振興事業協会作成の辞書)の結合価情報との照合を行った。

7

丸山直子(1995)より

①格表示の無形化は、ガ格・ヲ格・ニ格の格成分に起こる場合がそのほとんどをしめる。

②直後の動詞に係る場合にはヲ格が多い。

③間に他の構成要素が存在する場合(係る動詞との距離が離れている場合)、順位は逆転してガ格が多くなる。

④格表示が無形化した格成分は、動詞から離れて文頭に近くなると主題性を帯びてくる。主題性が高くなると、格の認定がむずかしくなるものも現れる。

8

第一の種類(小さく係るもの)について

格表示が無形化している格成分は、動詞から強く要求されている格成分である。デフォルトの語順が動詞に近いものであるという言い方をすることもできる。動詞によって、どのような格成分を要求するかが違う。それを動詞ごとに記述したものが結合価辞書である。結合価辞書との照合により、次のようなことがわかった。

・中核的な格ガ・ヲ・ニのうち、ヲが最も動詞からの要求度が高いと考えられ、無助詞格成分の格もヲ格であることが多い。

・ヲ以外については、ガ・ニのうち、結合価パターンの方の後ろの方に記述されている格成分(動詞に一番近いもの)である確率が高い。動詞に近いものは動詞との結合が強く、動詞により強く要求されている成分であると考えられる。(項構造を内項・外項に分ける立場に立てば、無形格成分の項は内項であることが多いということになる。)

9

・ニ格はその役割が多岐にわたる格であるが、到達点を示すニ／へが最も多く、その他にも移動動詞の目的、ある種の対象(「ニうかる」など)の場合に無助詞格成分として現れる。

・具体的には

ガーヲのパターンの場合には、ガ<ヲという強さの関係が、ガーニ／へ(到達点)の場合には、ガ<ニ／へ、ガーニ／へ(到達点)ーニ(目的)の場合には、ガ<ニ／へ<ニ、ニ(存在の場所、範囲)ーガの場合には、ニ<ガ、ガーニ(対象)の場合には、ガ<ニ、ガ1(主格)ーガ2(対象格)の場合には、ガ1<ガ2という関係があるとみられ、無助詞格成分の格はこの強い方の格である確率が高い。

10

第二の種類(大きく係るもの)について

第二の種類(大きく係るもの)は、動詞との結びつきが希薄で、格関係を越えた関係をなす。この点は助詞「は」の付いたものに似ている。

「そのお弁当、外で食べるとおいしいよ。」

「そのお弁当」は「食べる」に対してヲ格に立ち、

「おいしい」に対してはガ格に立つ。

「そのお弁当」と提示して、それについて「外で食べるとおいしい」と言っているのであって、個々の述語との格関係は、たまたまヲ格、ガ格になっているにすぎない。無助詞そのものは何ら格関係を示していない。

「私、ヅの横にダがあるんですけど。」(パズルをしているときの発話)

「ある」という動詞の格成分としては、「場所ニ」と「物ガ」が存在しており、「私」が浮いてしまう。「私の場合」くらいの意味で、大きく係る成分である。

11

その後の研究

大谷博美(1995a)(1995b)、野田尚史(1996)、加藤重広(1997)(2003)、杉本武(2000)、楠本徹也(2002)、黒崎佐仁子(2003)(2007)、菊地康人(2006)、中島悦子(2011)、苅宿紀子(2011)(2012)(2014)、金智賢(2016)、下地理則(2019)など

- ・「ゼロ助詞」「ハダカ名詞」等の用語
- ・「現場性」「親密さ(距離、丁寧さ、フォーマリティ)」
- ・古語、方言、他言語(韓国語)との対照
- ・無助詞がデフォルトという考え方

12

3. コーパスにみる無助詞

3.1. BCCWJ(コア)の調査

直後の動詞にかかるもの
名詞(一般)+動詞(一般)

遠くにかかるもの
名詞(一般)+読点

表 1 無助詞格成分の格(直後の動詞にかかるもの)

	一般名詞 + 一般動詞	ガ	ヲ	ニ	ト	その他	総語数
新聞	180	37	100	2	1	40	308504
雑誌	96	10	53	4	0	29	202268
書籍	47	5	19	0	2	21	204050
白書	6	1	1	0	0	4	197011
知恵袋	121	15	85	3	0	18	93932
ブログ	154	32	87	4	0	31	92746
計	604	100	345	13	3	143	1098511

直後の動詞に係るものは、圧倒的にヲ格が多い。

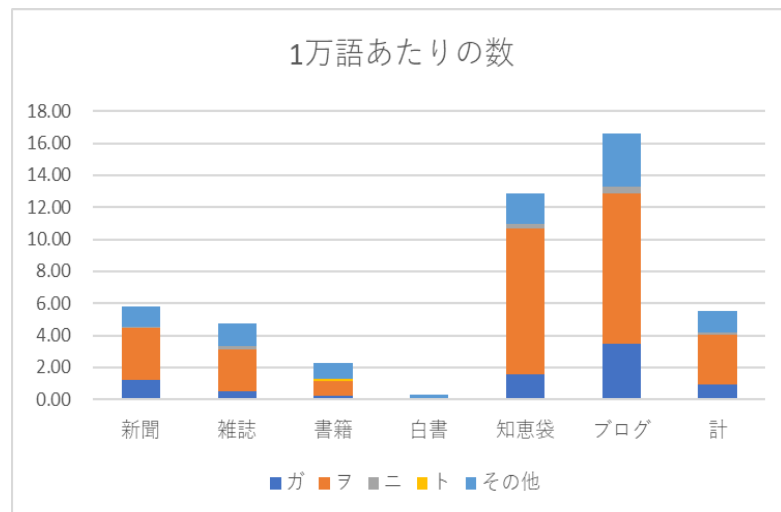


表 2 無助詞格成分の格(遠くにかかるもの)

	一般名詞+ 「、」	当該表現 (200中)	ガ	ヲ	ニ	カラ	デ	「これ」 等で受ける	提示 係り先なし	呼びかけ	計
新聞	983	16	8	2	1		3			2	16
雑誌	723	17	7	3	7						17
書籍	554	17	5	4	1		1	2	1	3	17
白書	473	2			1			1			2
知恵袋	158	24	14	1	3		1		2	3	24
ブログ	252	39	22	8	1	1	3		3	1	39

名詞の並列表現、言い換え表現等が主流だが、若干は、うしろの方の述語に係るものがある。こちらは、ガ格が多い。

小さく係る場合も、大きく係る場合も、特徴的なのは新聞である。新聞の見出しは独特な無助詞の現象を有する。

「両立の道探る」「終戦直後の日記見つかる」
「三十七歳二男、両親刺す」

また、知恵袋、ブログは、話し言葉に近い用い方をする。

17

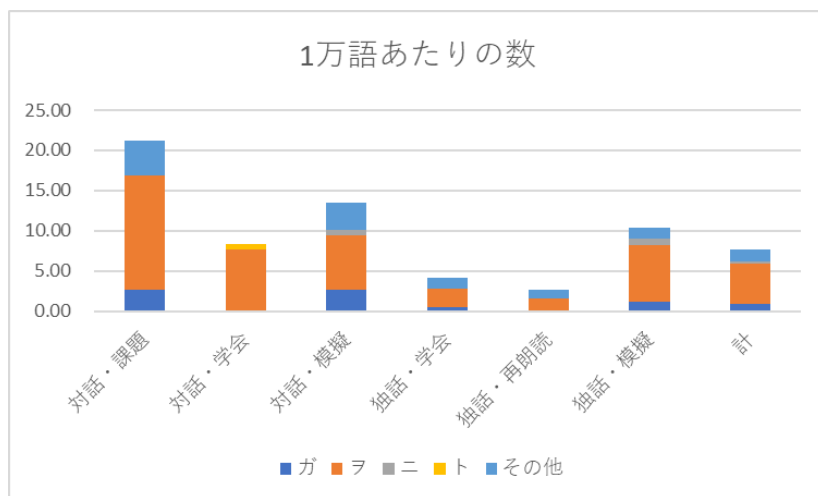
3.2. CSJ(コア)の調査

直後の動詞にかかるもの

名詞(一般)+動詞(一般)

	一般名詞 + 一般動詞	ガ	ヲ	ニ	ト	その他	総語数
対話・課題	24	3	16	0	0	5	11284
対話・学会	13	0	12	0	1	0	15554
対話・模擬	20	4	10	1	0	5	14792
独話・学会	90	11	50	0	0	29	216594
独話・再朗読	5	0	3	0	0	2	18558
独話・模擬	233	25	159	18	0	31	225165
計	385	43	250	19	1	72	501947

18



19

3.3. 日常会話コーパスの調査

直後の動詞にかかるもの

名詞(一般)+動詞(一般)

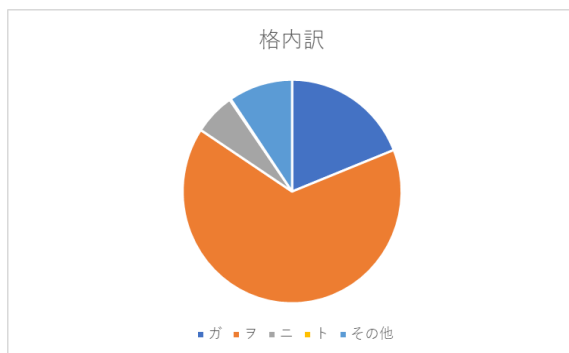
610,959語中2,320個なので、
1万語中の数は37.97個

活動内訳	個数
レジャー活動	35
レジャー活動・移動	23
移動	140
家事雑事	109
家事雑事・食事	135
学業	73
休息	315
仕事	117
社会参加	163
社会参加・食事	32
食事	392
身の周りの用事	67
付き合い	223
付き合い・食事	496
計	2320

20

付き合い・食事の内訳

格	個数
ガ	94
ヲ	324
ニ	30
ト	1
その他	47
計	496



21

直後の動詞にかかるものの比較

1万語あたりの個数

BCCWJ	5.50
CSJ	7.67
日常会話コーパス	37.97

22

4. 今後の課題

構文論として

- ・段階性(大きな結びつきと小さな結びつき)
述語との距離、複合語
- ・格成分か副詞成分か
「3年半乗り切った」
- ・ハの主題性と無助詞の主題性
- ・ハの対比性・ガの排他性
「ハサミはあ**る**？」「ハサミ**が**あ**る**？」「私**が**行く」

運用論(語用論)として

- ・書き言葉と話し言葉の違い(それぞれの中のタイプの違い)
- ・現場性
- ・改まり度

23

参考文献

- 大谷博美(1995)「ハとヲと ϕ を格の助詞の省略」「ハもガも使えない文」『日本語類義表現の文法(上)単文編』宮島達夫・仁田義雄編, 62-66, pp.287-295.
- 尾上圭介(1987)「主語に「は」も「が」も使えない文について」『国語学』150.
- 甲斐ますみ(1991)「「は」はいかにして省略可能となるか」『日本語・日本文化』17, 大阪外国語大学.
- 加藤重広(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.
- 苅宿紀子(2011)「談話におけるヲ格無助詞分の述語に関する考察」『早稲田大学日本語研究』20, pp.82-93.
- 苅宿紀子(2012)「雑談におけるヲ格動詞を述語とした無助詞文一名詞(句)の出現位置・種類別による分析に基づき」『早稲田大学教育・総合科学学術院 学術研究(人文科学・社会科学編)』60, pp.137-151.
- 苅宿紀子(2014)「無助詞」研究の現状と課題」『早稲田大学教育・総合科学学術院 学術研究(人文科学・社会科学編)』62, pp.147-162.
- 菊地康人(2006)「主題のハと、いわゆる主題性の無助詞」『日本語文法の新地平2 文論編』(益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編)くろしお出版, pp.1-26.
- 金智賢(2016)『日韓対照研究によるハとガと無助詞』ひつじ書房.
- 黒崎佐仁子(2003)「無助詞文の分類と段階性」『早稲田大学日本語教育研究』2, pp.77-98.
- 黒崎佐仁子(2007)「話題提示に見られる無助詞文の条件—ニュース見出しを中心として—」『早稲田大学日本語教育学』1, pp.67-80.
- 杉本武(2000)「無助詞格のタイプについて」『文芸言語研究 言語篇』38, pp.103-116.
- 筒井通雄(1984)「ハ」の省略」『言語』13[5], pp.112-121.
- 中島悦子(2011)『自然談話の文法—疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞—』おうふう.
- 丹羽哲也(1989)「無助詞格の機能 主題と格と語順」『国語国文』58[10].
- 野田尚史(1996)『「は」と「が」』くろしお出版.
- 長谷川ユリ(1993)「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』80.
- 丸山直子(1995)「話しことばにおける無助詞格成分の格」『計量国語学』19[8], pp.365-380.
- 丸山直子(1996)「助詞の脱落現象」『月刊言語』25[1], pp.74-80.

24